

## 民博におけるシソーラスの構想

著者	栗田 靖之
雑誌名	国立民族学博物館研究報告別冊
巻	017
ページ	81-96
発行年	1992-12-25
URL	<a href="http://doi.org/10.15021/00003557">http://doi.org/10.15021/00003557</a>

# 民博におけるシソーラスの構想

栗 田 靖 之\*

## 要旨

国立民族学博物館の情報検索システムにおいて、シソーラスをどのように構築するかを明らかにする。第1段階として、本館の研究者が収集した標本に対して、Human Relations Area Files (HRAF) が作成した、民族学のための文化項目分類のコード番号をつける。第2段階として、文化項目分類のコード番号によってソートを行い、それぞれのコード番号のもとに、標本名を集める。第3段階として、それぞれのコード番号のもとに集められた標本名についている修飾語をはずす。このようにして、標本名に文化項目分類のコード番号を対応させることによって、HRAF コードないしは、ひとつのキーワードを与えると、その類語を提示するシソーラスを構築することをもくろんでいる。このシソーラスの構想においては、研究者の用語制限は行わず、研究者の自由な発想のもとに用いられる用語を尊重するという観点からその構想を進めているのが特徴である。

## 1 シソーラスの必要性

国立民族学博物館(民博)では、1978年からコンピューターを導入して、情報検索のサービスを開始した。そしてその当初より、情報検索に用いるシソーラスの開発が、ひとつの大きな課題であると考えられていた。われわれが導入した検索のためのソフトウェアは、データを適当にセグメンテーションすると、セグメンテーションされた全単語が検索の対象となる IBM の STAIRS であったため、とくにデータにキーワードをつける必要がなかった。それに加えて、検索の対象となる全単語を逆順序にならべたインバーテッドファイルを用意し、語の後方一致による検索をも可能にしたこともあって、とくにシソーラスを用いなくとも、かなり検索の成果をあげることができた。

やがてデータが整備され、データベースを一般に公開することが考慮されるようになった。公開を前提として考えると、利用者は民族学ないしは文化人類学の研究者とは限らない。むしろ民族学とあまり関係のない利用者が多いであろう。このような検

\* 国立民族学博物館 第2研究部

索者が、民博のデータベースを検索しようとするとき、検索者の念頭に浮かんだ検索語と、コンピューターが蓄積しているデータとの間を対応づける用語集を、検索者に提示する必要がある。その意味においても、シソーラスの開発は、民博のデータベースの公開を考えると、どうしても実現しなければならない課題であった。

ここでは、現在、民博において進められているシソーラスの開発の現状を中心に報告したい。われわれは、目下のところ標本資料を中心とした物質文化のシソーラスを構築中であるので、ここでも、それに従った説明が中心となる。

まずはじめに、物質文化に関するシソーラスの整備状況を紹介し、それについて、われわれが作ろうとしているシソーラス全体の将来構想を明らかにしたいと思う。

## 2 標本の名前

民博では、標本資料と呼ばれる民具を、およそ19万点収集している。これらの資料は、世界の各地から収集されたものであり、それらのものの名前は、多岐にわたっている。

このような標本に名前をつけるとき、博物館には、ある種の伝統的な命名法がある。それは次のようなものである。

砧青磁鳳凰耳付花瓶（きぬたせいじほうおうみみつきかびん）

この命名法では、「砧」は全体の形を、「青磁」は材質を、「鳳凰耳付」は特徴を、「花瓶」は用途を表している。このような命名法は、とくに美術品を中心とした分野においては、伝統的に用いられている命名法である。この命名法には、形状、材質、特徴、用途をいっぺんに表しているという利点がある。しかしこのような名称が、その標本を指すときに用いられているかどうかは、大いに疑問がある。実際には、これらの標本には、通称がつけられている場合が多い。また利用者にとっても、このような名称で、検索を行うことは、たいへん困難である。それとともに、このような方法で標本に名称をつけようとするとき、命名者には、物質文化に対する深い学識が要求され、誰でもが、このような名称をつけることはできないのである。

このような事実をふまえて、われわれ民博では、研究者に対して、できる限り簡単な標本名をつけるように要請した。

### 3 民博における標本の命名

それでは、民博における標本に対する命名の方法を説明する。

民博の標本には1点ごとに、数枚にわたる「情報カード」と呼ばれる、その標本の学術的情報を記入するカードがある<sup>1)</sup>。これは他の博物館では、「調書」と呼ばれているものである。さてこの情報カードは、標本1点につき枚数が8枚、記入すべき項目は、十数項目にわたるものである。そこには、標本の採集場所、入手方法、使用民族名、制作方法、使用方法にわたって知り得る限りの情報を記入することになっている。

その中でも、もっとも大切なのが、標本資料に名前を与えることである。この情報カードの中では、1つの標本に関して、数種類の名前を書く欄がある。

まず第1の名前は、現地名である。ここでは、この標本を、その標本が用いられていた現地で一般的に何と呼んでいるかを記入することになっている。

海外標本の場合、現地名は、次のような方法で記入する。

1. 現地で呼ばれている名称を、ローマナイズして記入する。次にそれが何語であるかを、カッコ内に記入する。
2. 現地語の読みを分かりやすくするために、または、現地語のローマナイゼーションが確立していないときのために、その現地での名前をカタカナで表記する。
3. アルファベット以外の現地文字による標本名を記入する。現地文字による表記法のとときには、それが何語であるかをカッコ内に書き込む。中国で収集された標本資料などの、漢字による表記もここで扱われる。
4. 3. で表記された現地名の意味を、直訳して記入する。

次に、その標本の一般的な名称すなわち標本名を記入する。海外標本の場合は、その品物に対応すると思われる日本語の一般的な名称をここで命名する。国内資料の場合は、たとえば、現地名「すりつけぎ」に対しての一般的名称である「マッチ」のように記入する。

ここで問題となるのは、何が一般的な名称であるかということであろう。「情報カード記入について」では、このことを次のように書いている [標本整理委員会 1984: 311]。

---

1) 本書資料編A「情報カード」参照。

なにが一般的名称であるかについては、さまざまな問題が生じるところです。将来は、本館の収蔵品を統一的に分類する名称体系の整理をおこなわねばならないことになるでしょうが、それを待つわけにもいきません。現状ではアチック・ミュージアムの『民具蒐集調査要目』にあげられた名称などを参考にしながら、記入していただき、記入者の常識的な判断に、標本名の命名をおまかせするほかありません。一つのよりどころとしては、国語辞典に出てくる名称をなるべく採用していただくことです。また、ばくぜんとした一般名称ではなく、用途、材質など、その標本の特徴がわかるような名称を書きこんでください。たとえば、

桶ではなく	秣桶 <sup>まぐさかじ</sup> 、水桶
籠ではなく	背負籠 <sup>びく</sup> 、魚籠
短刀ではなく	銀鞘短刀
パイプではなく	陶製パイプのように

と指示されている。

民博の標本資料は、現在もこの原則に従って、命名されているのである。

#### 4 資料分類のためのコードについて

「情報カード記入について」にも記述されているように、民博は、その創立当初から、標本類に、統一的なコード番号を用いることを考慮していた。その結果、1982年から民博内に、「シソーラスに関する研究会」が発足して、日本ないしは外国で開発された民族学に関するコード体系の研究を行った。

その研究で知り得たことは、日本において、もっとも早い民具の分類に関する試みは、1936年（昭和11）アチック・ミュージアムが提示した『民具蒐集調査要目』である。この分類では、民具を身辺卑近な道具と定義して、生活全般の中で、民具の使用されている場面を8つに大きく分け、さらに各項目に33の項目をもうけて、民具を分類している<sup>2)</sup> [岩井 他 1985: 141]。

民具を分類する体系としては、このほかに文化庁が開発した民具分類の体系がある<sup>3)</sup> [文化庁内民俗文化財研究会 1979]。

この「シソーラスに関する研究会」においては、松澤員子がこれらのコード体系の

2) 本書「標本資料検索コードとしての HRAF コードの利用について」表 2 参照。

3) 本書「標本資料検索コードとしての HRAF コードの利用について」表 1 参照。

比較検討を行った。その結果、日本で開発されたこれらの分類体系は、当然のこととして、日本の民具を分類するには、たいへん有効なものであるが、日本以外の民具の分類には、不適當であるということであった。たとえば日本の民具には、牧畜関係の道具を分析するカテゴリーが、すこぶる貧弱である。

これらのコード体系を比較検討した結果、われわれとしては、**Human Relations Area Files** (人間地域関係ファイル, 通称 **HRAF**) が開発した2つのコード体系がよいという結論に達した。

## 5 HRAFについて

**HRAF** は、世界各地の民族誌に関して次のような方法で、ファイルシステムを構築している。

まずはじめに、研究の対象とする地域における基本的な文献を選定する。そして、その文献の各パラグラフに、どのようなことが記述されているのかを分析し、あらかじめ設定されたコード体系によるコード番号を付すのである。この分析に用いられるコードが、『文化項目分類』(Outline of Cultural Materials, 通称 **OCM**) [MURDOCK *et al.* 1982] と、『地域・民族分類』(Outline of World Cultures, 通称 **OWC**) [MURDOCK 1983] と呼ばれるものである。

図1に、**OCM**, **OWC** によって分析されたファイルを示した。かつては、このように分類されたファイルは、**HRAF** 本部が、世界中の24の正会員に対してはペーパーファイルで配布していたが、現在では、すべての会員に対して、マイクロフィッシュで供給している。

さて、これらの **OCM**, **OWC** のコードが、いかなる分類原理によって成立しているかは、本書「標本資料検索コードとしての **HRAF** コードの利用について」を参照されたい。

**OCM** コードは、大きくは2桁のコードで分類される第1のレベルと、3桁のコードで分類される第2のレベル、またその下にコンマ以下2桁のコードで分類される第3のレベルのカテゴリーがあるが、通常は、3桁コードで分類される第2のレベルのカテゴリーしか用いない<sup>4)</sup>。

もうひとつのコード体系である **OWC** は、基本的には民族分類を行っているが、その分類にさいしては時代区分を加味したものである。この場合の民族分類は、現在の

4) 本書資料編B「**HRAF**/文化項目分類 (**OCM**) コード」参照。

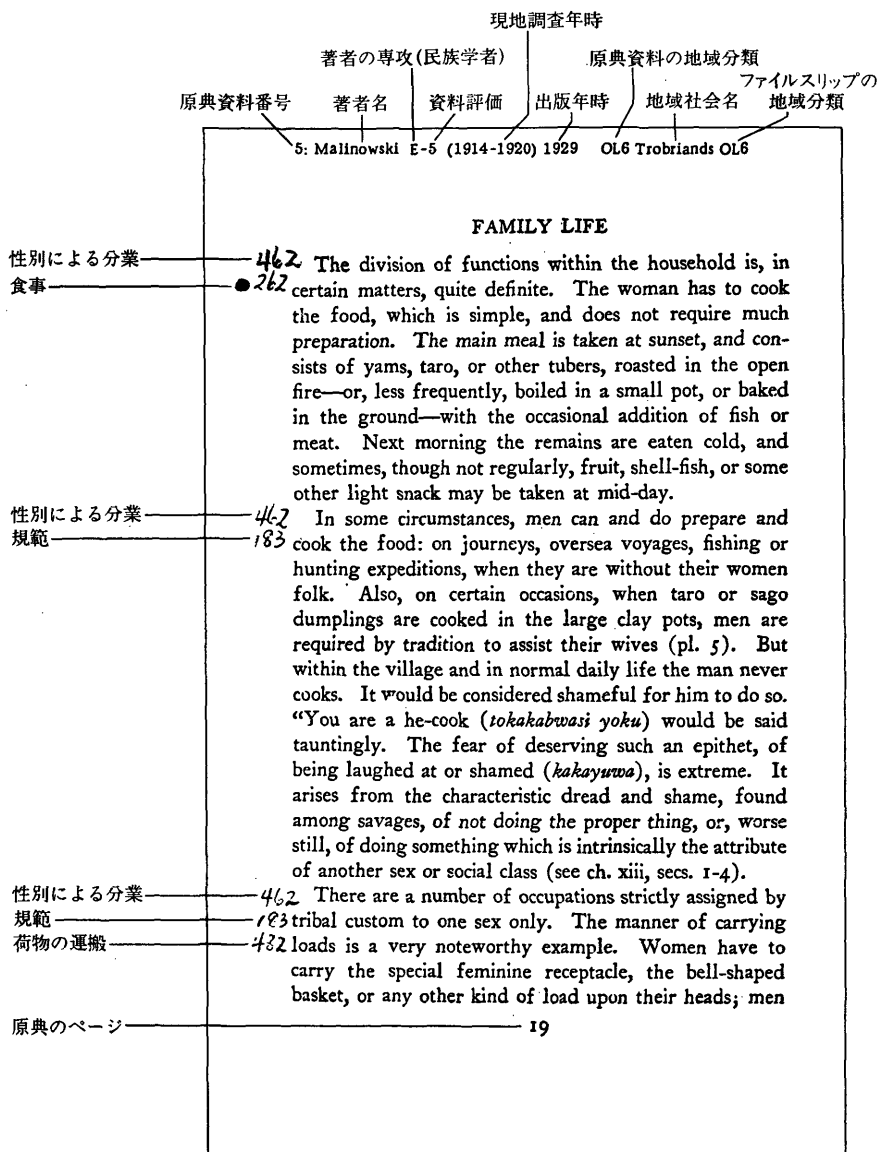


図1 HRAF ファイルスリップ

国家単位を超越した、民族分布をとらえてカテゴリー分けを行っているのがその特徴である。このコード体系は、アルファベットの1文字で示される第1のレベルのカテゴリーと、アルファベット2文字と2桁の数字で示される第2のレベルのカテゴリーから成り立っている<sup>5)</sup>。

民博としては、まずはじめに、英文で書かれた OCM と OWC のコード体系を翻訳することから開始した。その結果、1988年には OCM が、1990年には OWC が翻訳されて刊行された。ただし、OWC に関しては、その分類に関して疑義が出され、一般に刊行することはひかえ、館内資料として印刷した。

民博のあらゆる資料類には、この2つのコードが付されることとなった。これらのコードを資料類の分類に用いることには、多少の問題もあった。すなわち、これら2つの HRAF コードは、本来的には、記述された文章の分析に用いる目的で開発されたものであり、それを資料の分類に用いるとき、問題がないとはいえない。しかし、われわれが、この HRAF と同じようなコード体系を新たに開発することは、莫大な時間と労力が必要と思われた。またアメリカにおいても、われわれと同じくこの OCM コードを用いて、写真の分類を行おうとした試みが報告されていた。これらのことをふまえて、われわれも標本資料の分類に、この OCM コードを用いることに踏み切ったのである。

## 6 HRAF コードごとに語彙を収集する

そこでわれわれは、まずはじめに民博が所蔵する標本、音響、図書、映像の資料に、この OCM、OWC コードを付すことから作業を開始した。さいわい、標本資料、音響資料、映像資料、図書資料は、収集した段階から OWC を付すことが行われていたので、ことは比較的簡単に進行した。実際のコードづけの作業は、これら HRAF のコード体系に、十分習熟した専門のスタッフが行った。このときにわれわれが翻訳した OCM、OWC の翻訳版は、作業を進める上で大いに役に立った。

ここで、われわれのシソーラスづくりを、標本名を例にとりながら説明することにしたい。

第1段階として、標本に OCM コードを付したことは、さきに述べたとおりである。第2段階としては、われわれは OCM コード番号によってソートをかけた。その結果ひとつの OCM のカテゴリーのもとに集められた標本名を見ると、それらの名称には、用途を示す修飾語が付与されていることが多いことに気がついた。これは、われわれが標本に名前をつけるとき、できる限り修飾語をつけて、その標本の特徴を明確化しようとしたからである。このことは、「情報カード記入について」の標本名のつけ方に関する要望を、研究者が忠実に守っている証拠であるともいえよう。表1は、

5) 本書資料編C「HRAF/地域・民族分類(OWC)コード」参照。



表1 OCMコード291に集まった標本名のリスト

**OCM 291 <一般的服装>**

藍染絁綿織物 アザラン皮製帽子 足駄 足半 足半草履 足半すげ緒草履 (片足のみ) 足当草履 足半足履 足半草鞋 足半結緒草履 アジシクラクロス 汗取り(籐製) 頭被い 頭被い布 頭かくし(ヴェール) 頭飾り 頭飾りカバー 頭被り 頭に巻く布(女性用) 頭布 厚司 アツシ衣 アッシイ衣 アッシ衣 海女の道具一式 編あげ靴 編み笠 編笠 袷着物 袷袖なし 袷長着物 袷長着(襦袢;部分) 袷短着物 袷短着 衣装 衣裳 衣服 ウミタビ(タビ) 上着(大平車用) 上げき エプロン オーバー 大原女衣裳 回教帽 笠(蘭製) 笠(葦山) 皮製はきもの 貫頭衣(ボンチョ) 外套 着物(袷, 短衣) 着物(単, 長衣) 胸部用ミノ 切伏せ文衣 沓(毛皮製・深型) 靴(藁製) 靴下(女性用) 首巻 毛皮靴かざり 蹴出し 下駄 甲掛け 腰巻(女性用) 腰篋(ルカンアロウ) コンビネゾン 裂織(袖なし) サンドル製作過程 仕事着 下着(男性用) 下ばき(男性用) シャツ シャツ(労働着) 狩猟用防寒着 ショール 上衣(男子用) 女性用ウイビール(カランサ) 女性用上衣 女性用かぶりもの 女性用脚絆(徳昂族;崩龍族) 女性用腰布 女性用スカート 女性用すね当て(1対) 女性用ターバン 女性用長靴 女性用肌襦袢 女性用単衣長着物 女性用ブラウス 女性用ベスト 女性用ペチコート 女性用ワンピース(ポトシ地方) スカート(裳) 頭巾 袖なし 草履 竹下駄 田下駄 短衣(半袖, 袷) 男子用チョッキ 男性用肩掛け 男性用外衣 男性用ズボン ちゃんちゃんこ 長靴(毛皮製) てっきり(布製) 手袋 籐帽 とうろく(帯付き) トルコ帽 長襦袢 夏服 人形衣裳(衣) 人形衣裳(袴) はっぴ 鼻緒 脛巾(ぬいご製) 浜下駄 腹当 腹掛 はんてん 単衣着物 ひょうたん製容器 ビロードコート 深沓 服 褌(男性用) ブーツ(女性用) ベスト ぼうし 帽子 前掛け(男性用) マント(羽根と亜麻の繊維製) 未婚者用ワンピース 民族衣裳(女性用) 胸帯 モカシン(一足) 股引 椰子笠 山高帽 幼児・女子用前垂れ ワイシャツ 綿入れ短着 藁靴 草鞋(小型)

**OCM 291.04 <年齢や性別による相違>**

遊び着 袷子供着(女子用) 袷子供羽織(女子用) 衣服(子供用) 帯(女児用) 下駄(子供用) 子供用上靴 子供用腰篋 子供用ペチコート スカーフ(女児用) ストール(子供用) ズボン(子供用) 足袋(子供用) 男子用袷長着物 チョッキ(子供用) 手甲 長靴(小児用)

**OCM 291.08 <付属物と吊り具の用い方(例, ベルト)>**

アイヌ造りの刀と刀吊り帯 衣服用ボタン ウイビール用襟飾り 帯 革帯 腰帯 腰布 こしひも 女性用腰紐 胴バンド 羽織の紐 ベルト ベルト用締め具 牧人用靴下止め ワンパム

**OCM 291.09 <ヘッドバンド>**

頭帯 頭飾り 頭飾り(バンド) 頭飾り(ヘッドバンド) 頭飾りバンド 網状鉢巻 はちまき(網布) ヘアバンド

表2 OCMコード291に集まった標本名のリスト（修飾語をはずしたもの）

**OCM 291 〈一般的服装〉**

藍染絰綿織物 足駄 足半 足半草履 足半すげ緒草履 足当草履 足半足履  
足半草鞋 足半結緒草履 アジクラクロス 汗取り 頭被い 頭被い布 頭か  
くし 頭飾り 頭飾りカバー 頭被り 頭に巻く布 頭布 厚司 アツシ衣 ア  
ツシイ衣 アツシ衣 海女の道具 編あげ靴 編み笠 編笠 袷 袷着物 袷袖  
なし 袷長着物 袷長着 袷短着物 袷短着 衣装 衣裳 衣服 ウイピール  
ウミタビ 上着 上衣 上ばき ヴェール エプロン オーバー 大原女衣裳  
回教帽 笠 肩掛け かぶりもの 貫頭衣 外衣 外套 着物 脚絆 切伏せ文  
衣 靴 沓 靴下 首巻 毛皮靴かざり 蹴出し 下駄 コート 甲掛け 腰布  
腰巻 腰蓑 衣 コンビネゾン 裂織 サンドル 仕事着 下着 下ばき シャ  
ツ ショール 上衣 スカート すね当て 頭巾 ズボン 袖なし 草履 ター  
バン 竹下駄 田下駄 タビ 短衣 ちゃんちゃんこ 長衣 長靴 チョッキ  
てっきり 手袋 簾帽 とうろく トルコ帽 長着物 長着 長靴 長襦袢 夏  
服 葎山 袴 はきもの 肌襦袢 はっぴ 鼻緒 脛巾 浜下駄 腹当 腹掛  
はんでん 単 単衣着物 ひょうたん製容器 深沓 服 褌 ブーツ ブラウス  
ベスト ベチコート 防寒着 ぼうし 帽子 ポンチョ 前掛け 前垂れ マン  
ト ミノ 民族衣裳 胸帯 裳 モカシン 股引 椰子笠 山高帽 労働着 ワ  
イシャツ 綿入れ 藁靴 草鞋 ワンピース

**OCM 291.04 〈年齢や性別による相違〉**

遊び着 衣服 上靴 帯 下駄 腰蓑 子供着 子供羽織 スカーフ ストール  
ズボン 足袋 チョッキ 手甲 長着物 長靴 ベチコート

**OCM 291.08 〈付属物と吊り具の用い方（例、ベルト）〉**

襟飾り 帯 刀吊り帯 革帯 靴下止め 腰帯 腰布 こしひも 腰紐 胴バン  
ド 羽織の紐 ベルト ベルト用締め具 ボタン ワンパム

**OCM 291.09 〈ヘッドバンド〉**

頭帯 頭飾り 頭飾りバンド はちまき 鉢巻 バンド ヘアバンド ヘッドバ  
ンド

OCM コード291〈一般的服装〉のそれぞれのカテゴリーに属する研究者の命名した標本名のリストである。

このようなコードごとに分類された標本名から、これらの名称を、ただちに検索のためのソーラスに登録することは、適当ではないと考えられた。その理由は、それらの標本名があまりにも、限定されているからである。すなわちそれぞれの名称には、その品物を用いる性別、年齢、社会的集団の特性といった修飾語が、多くついているのである。そこで次にわれわれは、これらの標本名の修飾語をはずして、標本名を整理した。またその標本名の表記の統一も行った。その結果、それぞれのOCMカテゴリーのもとに集められた語彙は、ずいぶんと整理されたものとなった。表2にはこの段階での語彙を示した。

## 7 検索名の必要性

このような実験を行ううちに、ひとつの危惧がもちあがった。それはもし研究者のつけた標本名が、あまりにも不適切であった場合には、われわれは、検索の目的のための検索名といったものを、標本につける必要があるかも知れないということであった。もう少し具体的な例で、そのようなケースを示してみよう。

これは実際にあった例ではないが、これに近い例を参考にして、説明することにする。われわれの収藏品の中には、民博のスタッフが直接収集したものではなく、40年も50年も以前に収集された資料が、寄贈されて収蔵されている場合がある。そのような標本の中には、ただだんに「石」とか、「羽根」とかといった名称だけが記入されているものもある。しかし、それらの標本につけられた補足的な説明から、ある民族のシャーマンが身につけていた装身具であると判断されるのである。

そこで、このような資料をもとにして、その標本に対してOCMコード301の〈装身具〉というカテゴリーが与えられた。次にOCMのコード番号に従ってソートした場合、301の装身具の中に、「石」や「羽根」といった語彙が収集されたことになる。このようなことは、われわれが行っている語彙の収集の手続きに従っている限り、避けることのできないデータのひずみと言わなければならない。

このような、一見奇異と思われる語彙がまじりこむことを避けるためには、一番最初の段階、すなわち標本名を変えておけば、このようなデータのひずみは、最小限度にすることができると思われた。しかしわれわれは、研究者が標本に命名する段階では、いっさい干渉しないという原則がある。しかしもし研究者がつけた標本名があま

りにも検索するという見地からみて不適当であると思われる場合、研究者のつけた標本名とは違うもうひとつの名前、すなわち検索名を付すことも考えている。研究者がつけた修飾語のついた標本名からその修飾語をはずすというのも、実は、新たな検索名を付与していることにあたるのであろう。これは、研究者がつける標本名は、研究者の学識にゆだねられて、ただ検索の目的のために、新たな検索名を付すという原則で処理されるべきであると考えている。

## 8 民博研究者が用いなかった用語の集積

それと同時に、われわれのこのようなプロセスによって、得られた標本名には、致命的な欠陥がある。それは、われわれの語彙の収集には、民博の研究者が用いた名称のみが収集されるが、民博の研究者が用いない語彙は、別個の方法で収集しなければならないということである。

このことを解決する手段は、今日まで刊行されている民族学ないしは文化人類学、民俗学に関する語彙集を参考にして、そこからわれわれが、語彙を収集して追加していく方法がよいと思われる。物質文化の領域に関しては、このような目的のために、格好の材料があった。それは、柳田国男らが編集した『改訂総合日本民俗語彙』[柳田 1955]と呼ばれるものである。この全5巻からなる語彙集は、日本の各地方で、およそ民俗学が対象とする事柄の、ほとんどすべての方言での語彙が収集されている。将来われわれは、この語彙集の各項目を、OCMによって分類し、われわれが作っているシソーラスの中に、取り入れていきたいと考えている。

それとともに、1987年弘文堂が刊行した『文化人類学辞典』[石川 他 1987]は、現代わが国における文化人類学辞典としては、もっとも完備したものと考えられる。われわれは、この『文化人類学辞典』の各項目を、OCMによって分析し、それをコンピューターに入力して検索する試みを、弘文堂の了解のもとに、実験的に開始した。この試みによって、OCMの各カテゴリー中で、現代の文化人類学者がどのような用語を用いているのかを知ることができる。

このような柳田の民俗語彙集にしても、『文化人類学辞典』にしても、これらは、すでにある種の組織的研究のもとに収集された語彙集であるといえよう。しかし民俗学、文化人類学の分野は、他の学問領域と同じく、日々研究が進み、新たな概念が提示されつつある。このような学問の進歩をどのようにフォローし、いかにして新たな学術用語を収集していくかが、今後の課題であろう。

この課題を解決するためには、研究者の協力が不可欠である。しかし、研究者に対して、用語収集のために多大な努力を強いたり、いろいろな制限を加えることは、このようなシステムを、根本的に効率の悪いものとする可能性がある。経験的にも、このようなシステムを開発する場合、研究者に対する負担は、最小限度にしておくことが、システムを構築するさいの成功の秘訣であるといえよう。そこでわれわれは、研究者に対する要求は、最小限にとどめることとした。それは、論文作成時に、5つから6つ程度の、キーワードをサマリーの次に書き出してもらうというものである。この論文作成者により提示されたキーワードを、OCM ないしは OWC のコード体系との関連を検討し、それぞれにコード番号を与えようとするものである。このとき、これらのコード番号をつけるさいには、HRAF のコード体系に精通した専門家による種々の委員会のようなものが、必要であろう。

このような過程を経て収集された用語は、次にそれぞれ OCM, OWC のコードを中心にソートをかけたとき、それぞれの項目の中に登録され、OCM, OWC の各カテゴリーのもとに集められた語彙集の内容をより豊富なものにしていくのである。

## 9 シソーラスか同義語語彙集か

厳密な意味でのシソーラスは、何が上位概念であり、何が下位概念であるかといった概念の上下関係を示し、何がその分野で用いられている学術用語であることを認定したものである。しかしここでは、われわれは、われわれの研究分野における学術用語を定義しようとするものではない。用語の上下関係に関しても、HRAF の概念を採用したのである。われわれが構築しようとしているシソーラスは、われわれが依拠している HRAF のコード体系が2層の階層しか持っていないことから、その階層性はひじょうに緩やかなものであり、これはむしろ厳密な意味でのシソーラスというよりも、学術用語の同義語をひとつのグループにまとめた語彙集なのである。

このような語彙集を編集するときのひとつの注意すべき点がある。それは、ある言葉が、語彙集に登録されていないから、その語はその学界の学術用語として、認定されていないと考える傾向である。そのことは、同時に登録されていない用語を使用してもよいのかといった、用語使用の制限の問題とも関わっている。

われわれは、この研究者に対する用語の制限という考え方を否定している。人文社会科学においては、このような用語の制限を行うことは、研究者の豊かな発想を阻害するものであると考えるのである。われわれは、研究者が自由に用いる術語、用語

を、後から HRAF のコード体系によって分類するという方法をとった。その意味で、もし将来「シソーラス委員会」といったものが設置され機能を果たすとするならば、それは、用語を制限するためではなくて、研究者の用いた術語や用語を、どのコードに分類するか、あるいは既存のコード体系が十分対応できなかった場合、いかにしてそのコード体系を改良するかといった問題が、その委員会の大きな仕事となるであろう。しかし、例外的に、研究者の用いた名称が、あまりにも他の類語とかけ離れたものであった場合に、新たな検索名をこの標本に付すという作業は、この委員会の仕事であろう。

## 10 完成形のモデル

それでは、われわれが現在考えているシソーラスの完成した形を紹介したいと思う。その完成形は、以下のようなものである。

ここでは、検索者とコンピューターの対話形式によって、検索が進められるものとする。

- コンピューター： 1. 文化に関する項目で検索しますか、  
それとも、  
2. 地域ないしは、民族名で検索しますか。

検索者： 1 (「文化に関する項目で検索する」を選ぶ。)

コンピューター： あなたの知りたい文化項目に関するキーワードを、入力してください。

検索者： ネックレス

コンピューター： あなたの知りたいネックレスは、民博では〈装身具〉(OCMコード301)と分類されています。〈装身具〉(OCMコード301)の定義は、次項を見てください。

### 301装身具

- .01 身に着ける装身具の種類
- .02 取り付け、あるいは吊り下げ方法
- .03 年齢、性別、地位による相違

次をも参照

性的刺激 …………… 832

骨, 角, 貝殻の加工 …………… 321

装身具のネックレスの同義語として, 次のようなものがあります。

ヘアピン, かんざし, こうがい, 髪かざり, 冠, ヘアバンド, 鼻輪, イヤリング, ピアス, 首飾り, ネックレス, ロケット, レイ, ペンダント, ブローチ, プレスレット, 腕輪, 指輪, 足輪, アンクレット

これらの同義語の中で, 検索したい語を選んでください。

**検索者:** (検索したい語を選ぶ。)

**コンピューター:** あなたが知りたい地域ないしは民族名を入力してください。

**検索者:** エスキモー<sup>6)</sup>

**コンピューター:** あなたが知りたい「エスキモー」に関して, 民博では次のような分類があります。

- NA 9 北アラスカ・エスキモー
- NA10 南アラスカ・エスキモー
- NA13 西アラスカ・エスキモー
- NB 5 北極エスキモー
- NB 6 西グリーンランド・エスキモー
- ND 2 エスキモー
- ND 5 バフィン・エスキモー
- ND 6 カリブー・エスキモー
- ND 8 コパー・エスキモー
- ND11 マッケンジー・エスキモー
- NI 5 ラブラドル・エスキモー

---

6) 現在, 「エスキモー」は「イヌイト」と呼ばれている。

あなたが知りたい民族名のコード番号を選んでください。

検索者：（コード番号を選ぶ。）

コンピューター： あなたが選んだ文化に関する項目「ネックレス」で、かつ、あなたが選んだ、民族名「エスキモー」では、次のような情報があります。

1. 標本資料としては、 789 点あります。
2. 文献資料としては、 56 点あります。
3. 映像資料としては、 34 点あります。
4. 音響資料としては、 12 点あります。

それぞれの資料の中身を知りたい方は、該当する項目を選んでください。

検索者：（選択する。）

## 11 今後のシソーラスのための語彙収集

われわれのシソーラス構築の基本構想は、ここで説明したようなものである。この構想に従って、今後語彙を収集していくことにする。そして、さきに述べたように今後、研究者が著述する論文に、5から10程度のキーワードをつけ、できればそれに対応する OCM, OWC コードをも研究者につけてもらえればよいと思う。しかし、研究者に、HRAF コードに対する知識が乏しいときには、これを、一括して HRAF コードの専門家の手で行うことも考えなければならないだろう。これとともに、HRAF のコード体系を、新たなものに改編する必要もあるだろう。たとえば本稿では、OCM 291〈一般的服装〉という項目をひとつの例として示したが、この OCM 291 の中には、服装に関するあらゆる項目が含まれている。将来このような服装全体を一項目とするのではなく、いくつものコードに細分化させることの方が、良いかも知れない。

われわれが、シソーラスを構築するときその基本としたのは、HRAF コードであった。しかし HRAF は、慎重な構想の上に構築されているとはいえ、それは基本的には、文献分析のためのコードである。われわれが、民族学全般、すなわち物質文



化、民族学の学術用語、そして情報検索のためのシソーラスとして、このコードの基本的枠組みを用いたとしても、そこには、ある種の制限がある。われわれにとっての今後の課題は、このように、HRAF コードの体系を改編するとき、民博としての独自の立場からコード体系を改良していくのか、それとも、あくまで、HRAF との協調関係を持ちながら、コード体系を改編していくのが大きな問題となるであろう。

また同時に、過去に開発された既存のシソーラスを、今後どのような形でこのシステムの中に組み込んでいくのかも、今後の大きな課題となるであろう。

## 文 献

文化庁内民俗文化財研究会

1979 『民俗文化財の手びき——調査・収集・保存・活用のために——』第一法規出版。

標本整理委員会

1984 「情報カード記入について」国立民族学博物館(編)『国立民族学博物館十年史資料集成』国立民族学博物館, pp.309-316。

MURDOCK, G.P., C.S. FORD., A.E. HUDSON, R. KENNEDY, L.W. SIMMONS and J.W.M. WHITING

1982 *Outline of Cultural Materials. Human Relations Area Files.* (国立民族学博物館(訳))

1988 『文化項目分類』

MURDOCK, G.P.

1983 *Outline of World Cultures. Human Relations Area Files.* (国立民族学博物館(訳)) 1990

『地域・民族分類 (OWC)』(館内版))

岩井宏実・河岡武春・木下忠

1985 『民具調査ハンドブック』雄山閣出版。

石川栄吉・蒲生正男・梅棹忠夫・佐々木高明・大林太良・祖父江孝男(編)

1987 『文化人類学辞典』弘文堂。

柳田国男(監修), 民俗学研究所(編)

1955 『改訂総合日本民俗語彙』1巻～5巻。